

健康美

加藤 節子

春の始まりの節分。多くの人がそれぞれの福を願って神社に参拝、本殿の前で二礼二拍手一礼をして手を合わす。

子どもたちも両親や祖父母に連れられてお参りをしている。コンピューターゲームに夢中になったり、パソコンを自由に使いこなす今の子どもたちは、どんな福をお願いするのだろうか。

子どもの頃、私は泣き虫で、不細工な女の子だった。お世辞にもかわいいなんていえない。そんな女の子の私は、何よりもかわいくなりたいたと願った。

小学生の頃、「少女フレンド」や「マーガレット」という少女漫画が毎週出版されていた。数人の漫画家がそれぞれ漫画を連載していて、どの話も主人公の少女はそろってかわいらしい。目がぱっちりとして、スタイルは抜群だった。髪の毛はもちろんカールしている。どうしたらこんな風に、かわいい女の子になれるのかなと、ひそかに自分の髪をピンでとめてみた。

またヒロインのボーイフレンドは、足が長くて運動も勉強もできる。そんな夢のような設定で、話は進んでいくことが多い。ページをめくっているだけで、何か自分も主人公のようにになれるのではないかと錯覚してしまう。

そしてヒロインはおおむね病弱で、か弱くて、今にも倒れそうなおこと。そのため主人公は、まわりのみんなに大切にしてもらっている。私の願いは漫画の主人公のようにかよわくなることだった。

(私も心臓が悪くなると、こんなに優しくしてもらえるかなあ……)

と、ひとりこっそり心臓病になっている自分を想像していた。

そんなバカなことが私の願いだったが、本気だった。病気になることがどんなことかも知らず、漫画の世界で夢を見ていた。

子どもの頃のバカな願いが、まさか60歳の還暦を前にしてかなってしまふとは。6年前、不整脈の診断で、心臓ペースメーカー植え込み手術を受けた。そして、一昨年の心臓弁膜症の手術。

家族から心配をしてもらい、いたわりの言葉が聞けたのはちよつとした喜びだったが、病気になる苦しみも経験した。もう二度と手術台には上がりたくない。

今の私の願いは、健康、それだけである。健康であればどんなことも出来る。

「健康美」という美しさがあることを大人になって初めて知ったのである。

作者 加藤 節子

題名 健康美

山陽新聞夕刊

2020.04.02 掲載